痴報かご籠屋新聞

痴報籠屋新聞社
鴨川市イベ623
04-7092-9912
E-mail
naotomo@island.dti.ne.jp
トカラ塾H.P.
http://user.ecc.u-tokyo.ac.jp/~c080007/

かご編み教室

流山（ながれやま）で大フィーバー

10月26～28日

千葉県北部に位置する流山市には広大な水田地帯がいまなお生きている。江戸川に沿う一画に真澄屋（ますみや）の作地がある。そこには、奥行きが五十メートル以上もある野菜栽培用のハウスが五棟も建っていて、近隣の住人に有機栽培作物を供給している。その一棟がかご編み教室として開放された。主催者は真澄屋で、アチ（吉田篤）とその家族、それとイズたちが裏方をつとめてくれた。指導員は本社社主と、恵美（慶）である。竹割の助っ人として、近藤仁史と涼の二人。社主が買物かご、恵美が四海波（山ザル）の手ほどきを担当する。三日間の参加者は四七名。二日目の夜はロックコンサートも開かれた。少々大人数過ぎて参加者に迷惑をかけたことと社主はハンセイしていた。それで、希望者には補習講座を受けてもらうことにした。

会場風景

Photo　荒川健一

補習教室

一月十三日、十四日の好きな日のAM10:00～PM4:00

場所　鴨川市の本社敷地

受講料　流山会の参加者は無料。

申込み先　痴報籠屋新聞社か真澄屋

（作品持参のこと）宿泊可。

○　○　○

下の写真は参加者の山本青年が、持参したテルと社主に披露しているところ。亡父が編んだ背負かごのテルである。なつかしさに涙線がゆるむ。この人のオジに社主は若いころ世話になった。

Photo　荒川健一

2010年10月9日 〈かご屋の動き〉
～2011年1月9日 〈トカラ塾の動き〉
～同年2月26日

10/9 第三回トカラ塾ライブトーク
「平島堀削工事始め」
8/24発の十島丸で、鹿児島港から
トカラの平島に渡ったトカラ塾
青年団の報告会。民宿・たいら荘
の食材のゴーカさは共通認識と
なっていた。当日出席できなかった

PHOTO 荒川健一

が、今石みぎわの感想文は、平島と
己れとの距離を良く測っていた。

10/10 太作、芳朗、実香、早苗、ナオの五人
が車で鴨川へ向う。

10/11 有末賢氏、ライフヒストリー学の採
集のための来訪。被採集者は本
社社主。平成七年に発表された
「彷徨するアイデンティティ」(日ライフ
ヒストリーの社会学的所収 弘文堂)
の補充の仕事のためか。

10/14 斎藤荘一、増子ひろゆきの二氏来訪
石岡市で農業研修をしている。
竹かごを編みたいとのこと。ぜひ
入りで自転車乗りの若者が加わ
る。別府市にある竹の学校の卒
業生であった。夜は近くに住む、
農業に魅せられた若者・遠坂
もまじえての飲み会。

10/12～18 一トン半トラックの荷台に据えられた
"マンション"の改装におわれる。過労ぎみ。

10/19 トラックで西へ向う。午前七時少し前に県北の
船橋市をスタートし、夜七時過ぎに四日市
に着。スーパーセントーに入り、夕食を駐車
場で調理し、早目に床に入る。トラックマンション
の天井は一八〇センチあるので、きゅう屈さは
ない。しかも、今回の改装では明りが灯るよう
になった。バッテリーから直接に電気をひい
ている。窓も広い。助にあった収納スペース
がすべて取り払われ、荷台の幅の居住空間
ができた。いいことずくめの"マンション"である。

10/20 早朝四時に発車。国道一号線に出る。
鈴鹿峠を越えて滋賀県へ。栗東から
東名高速に入る。

PHOTO 荒川健一

10/20 東名・阪神高速・第二神明の高速道を使って九時過ぎに相生の道の駅・白龍城に着く。こんなに長距離を有料で走ったのは初めてである。過労ぎみの体をほぐすべく、温泉に入る。終日、マンション内で読書。

10/21 午後一時、岡山駅前で平島の日高守と落ち会う。旧飯蛇島民の墓参りを一緒にしようと、前から約束していた。二時間後に同じ場所で、農文協(社団法人)の甲斐さんと会うことになった。『季刊・地域』の原稿依頼であった。ひき受ける。

午後五時前に岡山を発って周防大島へ。もはや、出費がかさむことは考えないことにした。体がきつい。大金をはたいて山陽道の高速道を一気に山口県の岩国まで飛ばす。周防大島交流センターの常芸員・高木泰伸宅で夕食の接待を受ける。岡田、今石氏も同席し、トラック野郎を迎えてくれる。

10/22-23 交流センター主催のかご編み教室、竹切り、交流会、かご編みをする。

10/24 夜、岩国市広瀬の堀江農場加登を訪ねる。刈谷将司君の送別会に加えてもらう。

10/25 体調が下降し、これより先の道往きは不可能と判断して、鴨川へUターンすることにした。社主の来訪を待ってくれている友人たちへ、詫びのデンワを入れる。ケイタイ電話とは便利なものである。大分県由布の深瀬一家、日向市の成合、諸塚村の日髮氏、廣島市内の友人たち、中之島、平島、それにスワセ島の友人たちへ、「すんません。出直します」と。

11/7 代々木雲神社そうじ

11/20 第四回トカラ塾ライブトーク「九州行程」東京・梅ヶ丘のギャラリー・ガラで。中山銀士・橋爪大作・荒川健一による語りとビデオとスライドによる報告会

11/26-28 竹かご編み教室。流山市の真澄農園

12/4 茨城県守谷町で竹割り講習会

12/9-11 竹の本第三弾の制作準備のために荒川健一カメラマン来鴨。海岸の流木拾いと山中でのカズラの採集を行う。本題は未定だが、技無し、道具なし、金なしの人でも作れる竹細工の本になる予定。

PHOTO　稲垣涼

12/16 流山の講習会で働いた五人の慰労会が東京神田の中央線のガード下で行われた。恵美、武山、近藤、京、ナオの五人。

12/18 「ドニグリの背比べは知恵なのか？」本社借設の鴨川坂出ミーでこんな集いがもたれた。突出した存在を認めない平島は、昼が平準化への歩みを止めない。そんな中へ外部から押し寄せてくる権力にどう対処していくのだろうか。トカラ塾「南島学」の編集長・橋爪大作の報告を軸にアツく語る。午後四時から始まり、就寝は午前二時。途中、食事と酒が入る。参加者九人。

12/24 みずのわ出版（神戸市）の柳原一徳氏が来鴨。「平島放送」速記録を読む（夜題）の原稿の読み合わせ。音声（CD）と写真とを取りこんでの厚・本が五月に出る。

大島洋氏の

12/28 使用中のパソコンが起動しなくなる。こんなにパソコンに頼っていたのか、とあきれる。パソコン通のキヨシ（千葉市）に連絡したら、すぐに一時しのぎの器を送ってくれた。本体の修理が完了した旨、後日伝えてきた。監督は佐々木芽生。モダンアートの収集家である老カップルが主人公。自然を観察する眼で作品の美をとらえ、その背後にひそんでいる人間（作者）を追う。終盤近くなると、笑いと涙が止まらなくなった。東京では渋谷のイメージフォーラムでやっている。

鴨川市川口坂出ミー半景　金明植 Photo.

12/30 映画「ハーブ&ドロシー」を観る。

1/13-14 竹かご編みの補習講座を開く。

1/22 「ナオの南風語り」梅ヶ丘のガラで。

トカラ塾開講案内

1月22日（土）〈ナオの南風語り〉　題「呑みこむ」
島外から入ってくるものすべては、とりあえず丸呑みにせずにはおかない。コトバ、技術、宗教、人間を呑みこみ、消化不良で吐き出すこともする。その知恵を探る。

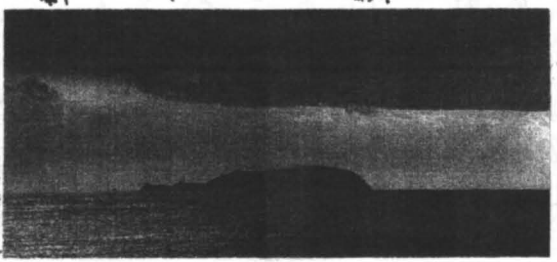
2月26日（土）〈第五回南島学ライブトーク〉「肥やしのチカヲ」
講師・堀充宏（葛飾区郷土と天文の博物館）
江戸から東京に代っても、変らないのが人糞の扱い。現代の環境のサイクルへの示唆に富む講話である。

3月26日（土）〈ナオの南風語り〉　題「入りこみ人（にん）」
渡来者を入りこみ人と呼ぶ。南拓者、布教僧、漂着者など、革命、難民、故郷喪失者につながる系譜である。

4月16日（土）〈第六回南島学ライブトーク〉「東南アジアの野生動物を追う」講師・浅田正彦（千葉県、中央博物館）

△△△

殿様の三回忌に高崎孫兵衛が一首ものした。それが殿の逆鱗に触れたという。種子島家の殿に名代家老職が抗ったのだろうが、一首の内容は伝わっていない。孫兵衛は平島へ流されることになった。



平島　写真 荒川健一

一八四九年（嘉永二年）に七年の刑と赦され種子島に戻っているから、平島に渡ったのは一八四二年であろうか。両刀差しのサムライがどんな想いで帆掛船に何十日も揺られて海原を渡ったことか。また、上陸地の土民にどのように振舞ったのか、その詳細は別項にゆずるとして、この遠島人（えんとうにん）の血が狂気を引寄せることになった。その血は、島の〝呑みこむ〟力を拒んで、ますますいき盛んである。本年で百六十九年目になるが、遠島人の気位いと、それが巻き起こす狂気とは、島に呑みこまれる気配がない。これまでに島ではかずかずの異物を呑み、そして消化してきた。平家一統の落人も、八幡様を焼き打ちしたカソリック教徒もである。

なぜ、呑みこまれないのか？ 因のひとつは時間という人間作りあげ概念の変化であろうか。それはここ五年の島内の著しい暮しの変貌がもたらしたものである。技術の進歩が島を襲ったともいえる。

〈呑みこむ〉力を衰弱させる技術

まず、接岸港ができ、ハシケ舟による沖掛りする定期船への通船作業が不要になった。道が開かれ、車が通うようになると、人の肩をかりて荷のひとつひとつを運びあげないで暮しができる。笑いや怒りが渦巻いていた共同作業が消えた。加わるに、各戸への電話回線が敷かれたことによって、島内での会話、交歩ごとは端折られる。手に入れたい品があれば、鹿児島の商店に直接に注文すればこと足りる。島民との交渉といっさい略してしまう。品物は船積みされた後、本船の巻き揚げ機で陸揚げされ、車の荷台に載せられて戸口まで届けられる。現金のやりとりはトカラ諸島特有の判取り制度を活用する。（以下略）

高崎孫兵衛の墓
（種子島 西之表市納曽）

読代カンハは下記へおかします　舞鶴市　[illegible]

数行で刊行本の紹介を試みるのは礼を失したことなれど…

（レ）他人とのつき合いが欠かせなかったなかでは、孤立した暮らしが狂気をおびき寄せたのだが、そして、その狂気と周囲がアミーバーのごとくに包みこんで離さなかった。たとえ、その狂気と精神衛生法にもとずいて隔離、監禁したとしても、島民は「かねて島に居る人が居らんごとなれば淋しか」と涙して病院へ送る。ケガの治療にでも出掛ける人に対するように「早よう帰って来んなあ、あかんどー」と背に浴びせる。それが、個の生活が可能になり、孤立感は弱わまる。狂気が収束に向うのではなく、監禁、隔離から開放され、大手を振って島内を闊歩するようになった。今度は保健所ではなく、ケイサツが島の側から呼び出しをくうことになる。来か、ケイサツは島内には存在せず、遠く離れた鹿児島市内にしかないので、"通報"には気易く踏みきれない。

科学技術の進歩と、それにともなう時間概念の変化が〈呑みこむ〉力を著しく衰弱させている。

時間の問題の詳しい内容は次回の「南国語り」（一月二十二日(土)）で披露される予定。

『山上の蜘蛛』神戸モダニズムと海港都市』『窓の微風』二書ともに季村敏夫著

大部な二書が神戸市にあるみずのわ出版から出された。最初の書は神戸詩人事件の検証に始まり、今日の有事法制の枠組みにまで論及している。一九四〇年に警察権力によって捏造された思想弾圧事件の詳報は、今日のできごとでもある。こうした掘り起こし作業こそ、明日のとは言わないが、今を生きる糧と養分から一番遠い人間を夢みたはずの筆屋

（書痴の近日読）

『トワイライト・フリークス』山田塊也 ビッジプレス 2001年刊

刊行十年を経て、ますます人気の高まっている。著者は2010年4月に他界したが、社主の中では日々、親しさを増していく。社主はポンと行動を共にしたことはないが、ラブコールを一方的に送り続けてきた。ポンの移り住む先に訪ねて行った。スワ五島、ボスミ、寄居、ミブなどなど。ポンには「カウンターカルチャーの旗手」の名称も不要ならば、「ヒッピー」も「フリークス」も要らない。自らを「お祭りポンた」と笑うが、これも要らない。故地の高山では「ポン」が特異な意味をもつから使ったのだろうが、たえず地べたにはいつくばることを良しとしていた。ポンの生きざまを記録にとどめるべく、社主は少しづつ動いてくれる。